

京都地方・簡易裁判所の発掘調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 調査区1の江戸時代前期のようす(南東から)

京都御苑の南側で新しい京都地方・簡易裁判所の建物が完成しようとしています。裁判所がある場所は平安京内にあたっており、また、鎌倉時代から江戸時代にかけても市街地の一部であったことがわかっています。そこで、建設工事に先立って発掘調査を行ないました。

調査で見つかった最古の遺構には古墳時代後期(約1400年前)の墓があります。烏丸丸太町の交差点では以前に竪穴住居も見つかっており、平安京造営前に集落があったことが明らかとなりました。

平安京造営時には大規模な整地が行なわれました。当時の呼び方によると、ここは左京二条四坊十

町にあたります。平安時代前期(約1200～1000年前)の井戸や土器を捨てた穴が見つっています。

平安時代後期から鎌倉時代(約900～700年前)になると遺構の数が増えます。この頃、白河法皇や後鳥羽上皇の御所があったという記録が残っており、その一部が見つかったと考えています。建物の規模はわかりませんが、一部には瓦が葺かれていたようです。

室町時代(約700～530年前)になると、区画の溝や塀が見つかるようになります。道に面した規模の小さい敷地に建物が建ち並んでいたようすが想像できます。ところが、戦国時代(約530～400年前)になると、遺構の数が増

に少なくなります。戦乱から身を守るため、住んでいた人々も別の場所に移ったのでしょうか。

江戸時代(約400～130年前)、この地は再び活況を呈するようにな



図1 『洛中絵図』に描かれた調査地周辺



写真2 平安時代前期の土器



写真3 室町時代中期の土器



写真4 江戸時代前期の土器

ります。江戸時代前期に描かれた『洛中絵図』には、「松平中務少輔」の屋敷があったようすが示されており（図1）、調査でも屋敷を区画する塀や建物が見つかりました（写真1）。江戸時代後半には町屋が建ち並ぶ、ほぼ現代のこの付近と同様の景観が形作られたようです。

出土した遺物の大部分は土器が占めており、他に瓦・土製品（土鈴や鋳型）・石製品（石斧や硯）・金属製品（銅鏡や火箸）などがありました。

写真2は平安時代前期の土器です。橙色をした素焼きの土師器・くすべて黒く焼いた黒色土器・^{あな}釜で焼いた灰色の須恵器・釉薬をかけた灰釉陶器・緑釉陶器があります。碗や皿の形や大きさも様々です。

写真3は室町時代中期の土器です。大多数を土師器の皿が占めるようになり、他には黒色の瓦器の碗や鍋があります。土師器の皿ははっきりと赤色と白色に分かれ、需要に応じて作り分けられたと考えられます。

写真4は江戸時代前期の土器です。土師器の皿の割合が減り、国産の陶器が増えています。産地には丹波・信楽・瀬戸・美濃・北部九州などがあります。また、古伊万里と呼ばれる国産の磁器も含まれています。

裁判所の調査では千数百年間の人々の生活の一端を知ることができました。調査の積み重ねにより京都の歴史が少しずつ明らかになっていくことでしょう。

（山本 雅和）